

議案第13号

令和5年度板橋区登録文化財の決定について
上記の議案を提出する。

令和6年3月7日

提出者 板橋区教育委員会教育長 中川 修一

令和5年度板橋区登録文化財の決定について
東京都板橋区文化財保護条例（昭和58年板橋区条例第16号）第4条第1項
の規定に基づき、下記のとおり新たに文化財を登録する。

記

1 板橋区文化財として新たに登録するもの 2件

有形文化財（絵画、歴史資料）

- ・中台延命寺所蔵「大般若釈迦十六善神図」及び「釈迦涅槃図」

無形文化財

- ・鼈甲細工（岡 匡巳）

（提案理由）

板橋区文化財保護審議会から、板橋区登録文化財の登録について答申があった
ため、これを承認し文化財登録をする必要がある。

令和6年2月15日

東京都板橋区教育委員会 様

板橋区文化財保護審議会

会長 松崎 憲



板橋区文化財の登録について（答申）

令和5年8月2日付け5板教生第367号の2で諮問のあった標記のことについて、板橋区文化財保護審議会で本日令和6年2月15日に審議した結果、下記のとおり意見が一致したので答申します。

記

- 1 板橋区文化財として新たに登録するもの 2件
有形文化財(絵画・歴史資料)
 - ・中台延命寺所蔵「大般若釈迦十六善神図」及び「釈迦涅槃図」無形文化財
 - ・鼈甲細工（岡 匡巳）

令和5年度板橋区文化財保護審議会 答申内容一覧

1 新たな文化財の登録

| 番号 | 名称 | 所在地または居住地 | 所有者・管理者または保持者 | 種類 | 内 訳 | 来 歴 ・ 内 容 及 び 諮 問 理 由 |
|----|--|--------------|----------------|----------------|-----|--|
| 1 | 中台延命寺所蔵「大般若釈迦十六善神図」及び「釈迦涅槃図」(なかだいえんめいじしよぞう「だいはんにやしやかじゅうろくぜんしんず」および「しゃかねはんず」) | 板橋区中台3-22-18 | 宗教法人延命寺(えんめいじ) | 有形文化財(絵画・歴史資料) | 2幅 | <p>本作品は、中台延命寺(なかだいえんめいじ)が所蔵する「大般若釈迦十六善神図」、「釈迦涅槃図」の2幅と各画像に付属する函で構成される。当寺は真言宗豊山派の寺院で、総本山は長谷寺(奈良県)、中本山は練月山愛染院観音寺(練馬区)である。17世紀に始まったといわれ、中台村の菩提寺として信仰を集めていたが、享保3年(1719)と文化2年(1805)の火災で堂や古文書類も焼失したと伝わっている。その後、嘉永年間(1848~55)を中心に村人によって復興が図られ、両作品も復興に伴う奉納物と考えられる。</p> <p>「大般若釈迦十六善神図」は紙本着色、縦268.0cm、横102.4cm、函書と本画の裏書に、嘉永2年(1849)2月21日に当時の住職と中台村の住人18名が奉納した記録がある。また、本画の裏書によると、制作者は会津藩(現福島県)出身の大比丘林岳(だいびくりんがく)という僧侶である。彼は無言蔵憲海(むごんぞうけんかい)ともいい、会津や京都で仏画の書写研究・制作・出版活動を主導し、貴重な文化財の継承に貢献した。</p> <p>「釈迦涅槃図」は、紙本著色、縦226.5cm、横161.0cm、本画に嘉永2年11月に大成憲里(だいじょうけんり)が制作した記録がある。函書によると京都の山王寺から愛染院あてに送られた仏画である。大成憲里は、越後国(現新潟県)出身で、憲海の直弟子である。憲海の右腕として仏画研究・出版事業を支え、憲海の死後も近世末期における仏画出版事業を継承した。</p> <p>両作品は、制作者が判明している貴重な事例であり、調査研究によって関連資料である憲海・憲里たちが制作した「田村宗立旧蔵仏画粉本(たむらそうりゅうきゅうどうぶつがふんぼん)」が京都市立芸術大学芸術資料館に保存されていることがわかった。現地調査を行った結果、両作品と関連資料に酷似点が多数確認され、制作時の下絵になったことが推察される。また、本作品は憲海・憲里たちが本格的な仏画工房を設けるよりも前に制作された時期のものであり、彼らの技術の高さや組織体制の確立を裏付ける資料といえる。よって、本作品は、近世仏教美術史における仏画僧の活動と、中台延命寺の復興のために中台村や愛染院からの支援事業として奉納された師弟の作品であるという位置付けができるとともに、近世後期中台村における中台延命寺への信仰の地域的な広がりを解明する重要な資料として評価できる。</p> |
| 2 | 鼈甲細工(べっこうさいく) | 板橋区弥生町15-1 | 岡匡巳(おかまさみ) | 無形文化財 | | <p>東京で製作されている鼈甲細工は「江戸鼈甲」とも呼ばれ、長崎・大阪とともに三大産地となっており、東京都の伝統工芸品にも指定されている。現在、鼈甲細工は、東京においては眼鏡フレームを中心に、長崎においては櫛や簪といった小物を中心に製作されている。技術保持者の岡匡巳(おか・まさみ)氏は、昭和44年(1969)生まれの55歳。祖父の梅五郎氏、父の信彦氏と3世代に渡る鼈甲細工の職人として活動している。岡眼鏡製作所は、香川県高松市出身の祖父梅五郎が豊島区巢鴨の宮本氏のもとで技術を習得し、昭和38年に独立し、区内弥生町に移転して店を構えたことに始まる。匡巳氏本人は父の信彦氏に師事して、技術を習得し、約33年間のキャリアがあり、鼈甲細工のメガネフレームを中心に作品づくりに取り組んでいる。現在は東日本べっこう甲事業協同組合、板橋区伝統工芸保存会に所属する。なお、匡巳氏は、眼鏡全体を鼈甲で製作する「総鼈甲」の高い技術を身に付けており、令和5年3月には、鼈甲制作の功労が認められ、近年、東京都伝統工芸品産業功労者や伝統工芸士に認定されるなど、業界内での評価も高い。「鼈甲細工」を無形文化財として登録し、保持者の技術の保存・継承を図っていきたい。</p> |